

シュヴァイツァーにおける世界哲学の構想

金子 昭

はじめに

アルベルト・シュヴァイツァー (Albert Schweitzer 1875-1965) は、その文化哲学および宗教哲学の探究において、人類の精神史を射程においた、いわば世界哲学を構想していた。このことは『文化と倫理』『インド思想家の世界観』『キリスト教と世界の諸宗教』などの既刊著作からもある程度判明していたことであるが、近年次々と刊行されるようになった遺稿集によっていっそう明らかになっていく。

哲学と神学の両分野において展開する彼の思想は、生命への畏敬の倫理という名で最終的に定式化される倫理的神秘主義の性格を帯びている。この倫理は、彼自身のアフリカでの生命の根本体験を契機としてると同時に、現代文化への厳しい批判的認識、

そして世界観をめぐる格闘の歴史として位置づけられるヨーロッパ精神史への深い反省的探究を踏まえたものである。

しかし遺稿集から読み取れるのは、彼が自らのこの思想をさらに人類の精神史全体の中において定位して考えようとしたこととあり、そこに単なる比較思想を超えた彼の独自の世界哲学の視座がある。本稿では、遺稿集における最新の知見を踏まえながら、その世界哲学の構想について紹介し、評価と批判的検討を加えたいと思う。

一 シュヴァイツァーの著作活動

における既刊著作と遺稿の位置づけ

遺稿において、世界哲学の構想が述べられているのは、主として哲学的著作である。現在までに公刊された遺稿集の中では、

『文化哲学第三部』および『世界宗教における文化と倫理』がそれにあたる。

シュヴァイツァーは生前に幾つかの哲学的著作を刊行したが、その刊行時期と遺稿の執筆時期を年代順に並べてみると、次の通りになる（*ゴシックは生前に刊行された著作）。

一九一四—一九一八年 「文化と文化国家」（旧題「われら並流者たち」）

一九一九—一九二二年 「世界諸宗教における文化と倫理」

一九二三年 『文化哲学第一部』 『文化哲学第二部』（『文化の衰退と再建』 『文化と倫理』）

一九二三年 『キリスト教と世界宗教』

一九三二—一九三三年 『文化哲学第三部』（生命への畏敬の世界観）第一分冊

一九三三—一九三七年 『文化哲学第三部』（生命への畏敬の世界観）第二分冊

一九三三年 「世界宗教における人間と生物」

一九三四年 『インド思想家の世界観』

一九三四年 「今日の精神生活における宗教」（ヒッバート講演録）

一九三四—一九三五年 「自然的宗教と自然的倫理」（ギッフォード講演録）

一九三九—一九四〇年 「インド及び」中国思想の歴史」

一九三九—一九四二年 『文化哲学第三部』（生命への畏敬の世界観）第三分冊

一九四三—一九四五年 『文化哲学第三部』（生命への畏敬の世界観）第四分冊

これを見れば、既刊著作の周辺に膨大な遺稿群が存在していることが分かる。既刊著作は、実は背後にこれらの遺稿群をふまえて生前に刊行されており、内容的にもそれらの一部分ないし縮刷版としての性格が明らかになるのである。シュヴァイツァーがこれらの著作活動で意図していたのは、全人類の精神史を世界観と倫理の観点から徹底的に検証することであった。ここでは、宗教と哲学の区別は単に相対的な意味しかもたない。そしてもちろん、その検証の営みの頂点にあるのは、彼の生命への畏敬の思想なのである。

二 「世界哲学」的探究の方法論としての世界観と倫理

シュヴァイツァーは、世界観と倫理という二つの視座から大きく世界の諸思想を裁いていくという方法で論を展開する。個別の思想評価の細かい点については、当該分野の専門的研究者から種々異論が当然出てこよう（なにより彼は、原書でこれらの著作を読んでいくわけではなく、英独仏の翻訳を用いているのであ

る)。しかし私は、むしろその大胆な裁き方があればこそ、スケールの大きな世界哲学の構想を展開しえたというその一点を評価したい。

世界観と倫理は、相互に深い関連を有するものと、彼は考える。世界観について言うと、彼は広義の世界観 (Weltanschauung = 世界の見方) を、狭義の世界観 (Weltanschauung = 世界認識) と生命観 (Lebensanschauung = 生命体験) とに分けている。この狭義の世界観と生命観とは本来は別物であるが、彼にあっては、世界観から生命観が生じるのではなく、生命観から世界観が生じるものとされる。この生命観の立脚点は、「私は生きんとする生命に取り囲まれた生きんとする生命である」(KE 380, LD 133) という、彼自身の生命の根本体験において端的に表明される。ここから自他の生命を尊重し、その維持と促進に向けて手助けしていくとする思想が、彼の生命への畏敬の倫理となる。

そして完成された世界観は神秘主義という形を取り、しかもそれが倫理的なあり方をとるべきである(倫理的な神秘主義)と、彼は主張した。当然、生命への畏敬も世界観としては倫理的な神秘主義である。

「世界観が究極において、我々が無限な存在と精神的に一体となることであるとすれば、完成された世界観は必然的に神秘主義となる。……神秘主義のみが世界観の理想に適合する。

これ以外の全ての世界観は、その様式からして不完全であり、

世界観というには相応しいものではない。」(LD 9)

「神秘主義が深い世界観であるのは、それが人間を無限なるものとの精神的な関係へともたらす限りにおいてである。生命への畏敬の世界観は倫理的な神秘主義である。これは無限なるものとの一致を倫理的行為によって実現しようとする。この倫理的な神秘主義は論理的思索より発している。」(LD 195)

そしてこの引用からも分かるように、シュヴァイツァーは、思想における倫理性というものをきわめて重視している。倫理的な神秘主義という考え方からして、それが世界観を評価する試金石ともなっていることが明らかである。

彼は、世界観と倫理という二つの鍵概念の組み合わせによって、ヨーロッパ精神史だけでなく、人類の精神史全体をも通覧的に検証しようとした。その際、彼は幾つかの分類法を試みているが、それらはいずれも内容的に重なり合うものである。主要な類型論としては次のようなものが挙げられる。

『キリスト教と世界宗教』における類型論 (CW 22)

(1) 世界観について…楽観論の世界観か悲観論の世界観か、また一元論の世界観か二元論の世界観か

(2) 倫理について…倫理的動機がどの程度強いのか、それとも論理的説明の傾向が勝っているか

『文化と倫理』における類型論 (KE 124)

(1) 世界生命肯定的自然哲学に倫理を基礎づけようとするもの

- (2) 世界生命否定的自然哲学に倫理を基礎づけようとするもの
- (3) 自然哲学を顧慮せず、それ自体で倫理的な世界観に到達しようとするもの

『文化哲学第三部』における類型論 (P. III 374, 375)

- (1) 倫理的な生命—世界肯定の世界観に属するもの
 - (2) 非倫理的な生命—世界肯定の世界観に属するもの
 - (3) 倫理的な生命—世界否定の世界観に属するもの
 - (4) 非倫理的な生命—世界否定の世界観に属するもの
- このうち、『文化と倫理』の類型論に主に従って、世界の思想を分類・評価すれば次の通りになる。

- (1) 世界生命肯定的自然哲学に倫理を基礎づけようとするものとして、中国思想(孔子、孟子、老子、荘子)および彼らの弟子たち)およびヨーロッパの大半の思想がある。これらの思想は、世界を楽観論的かつ倫理的に解釈し、そのことによって世界の運行や目的に人間の使命や人生の意味を重ね合わせる傾向がある。それゆえ、世界観としてはいづれも楽観論的—倫理的な一元論である。ただし、シュヴァイツァーによれば、世界認識と生命体験との本質的な齟齬のゆえに、このやり方は現実的世界と人間存在の意味との間の亀裂を埋めることはできない。
- (2) 世界生命否定的自然哲学に倫理を基礎づけようとするものとして、インドの宗教的思想およびヨーロッパのごく少数の思想(ショーペンハウアー)がある。これらの思想は、世界を

悲観論的かつ倫理的に解釈して、それによって世界や生存からの脱却を目指そうとする傾向がある。それゆえ、世界観としてはいづれも悲観論的—倫理的な二元論である。これも同様に、世界と人生との亀裂が現実には残されたまま、それが隠蔽されているという。

- (3) 自然哲学を顧慮せず、それ自体で倫理的世界観に到達しようとするものがある。これには、中近東に生じた諸宗教(ゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教など)が属する。これらは、倫理的人格神や理念が世界とは独立したものとみなす二元論的—有神論的世界観を有する。世界と人生との亀裂を直視し、それをあえて承認するこの方式こそ、彼が推奨する世界観の道程である。

三 生命への畏敬を世界観

として展開することのアポリア

遺稿の哲学的著作の中心である『文化哲学第三部』の構想は、「生命への畏敬の世界観」という副題を持っている。それは、世界観と倫理という観点から、自らの生命への畏敬の倫理思想の卓越性を示そうとしたところにある。シュヴァイツァーが「生命への畏敬」の「世界観」として構築しようとしたのは、人間において直接的に体験されるところの生命観(「人生観」(Lebensanschauung))の意味での世界観である。

しかし、それはもともと「未完成のドーム」(KE 35)のほうであった。彼は、それを体系的に展開させようと、何度も異なる着始で議論を手掛けたものの、満足のいく論述にはならなかったようである。『文化哲学第三部』が、巨大な未完成のプロジェクトとして残されたのも、そのためであった。彼自身、世界認識と生命体験との本質的な齟齬を承認する二元論的世界観を了解していたはずなのに、これはどうしたことだろう。倫理を土台にして世界観を構築しようとする、どうしても非倫理的な世界を取り込んでしまい、「生命への畏敬」による「世界観」は自己矛盾をきたすのである。そこに見いだされるのは拡張、詳論、強調点の移動ばかりである。それゆえ、彼がこうした巨人的な試みの不可能性を感じ、ますます新しい、それゆえ絶望的とも思えるほど、何度も最初からやり直さざるを得ず、結局は巨大なトルソで終わらせてしまった(Lenk 41, Neuenstrander 324)という評価も、うなずける。

しかし新しい思想が遺稿に見られないことは、すでに以前から予想されていた。シュヴァイツァー自身、『文化哲学第二部』の序言の最後で、第三部「生命への畏敬の世界観」の内容について「これまで過去の世界観探究の対決の結びとしてたんに素描するにとどめたこの世界観〔生命への畏敬の世界観〕を詳述する」(KE 96f)と述べている。彼は、『インド思想家の世界観』(一九三四)刊行後、一九六四年に九十歳で亡くなるまで長生きし、その

間(三十年間)の書簡集や彼自身のインタビューなどが残されているが、それらからも彼の生命への畏敬がさらに深く世界観として探究された様子は見られないのである(金子 309)。彼はあくまで世界観という言葉に固執しているが、実質的には倫理に基づく世界観構築の試みからは離れつつある(Günzler 179)ともいえるのである。

着目すべきは、むしろ彼が『文化哲学第二部』で示唆した「生命への畏敬の世界観」の試行錯誤の探究が、結果として、もう一つの意図としての人類の精神史の詳論となつて展開されたことなのである。シュヴァイツァーは、この詳論をヨーロッパ精神史だけでなく、人類の精神史において展開しようとした。この意図は、生命への畏敬の世界観の体系的論述に代わるような形で次第に『文化哲学第三部』の前面に登場してくる。

四 人類の精神史の詳述とその意味

遺稿の『文化哲学第三部』と『世界宗教における文化と倫理』から判明することは、シュヴァイツァーの哲学的探究の広大さとその深さである。それは、もはや単なる文化哲学の領域を超えて、哲学や宗教の両方を含めた人類の精神史全体へと射程を伸ばしている。彼の思想は、これらの遺稿集にあつては、神学と哲学との媒介がいわば一種の宗教哲学的な探究として行われているのである。

『文化哲学第三部』は、全体として大きく分けて四度に渡って書き改められ、そのまま四分冊として編集されている。そこには、世界観、倫理、神秘主義に関する幾つかの議論の再検討や人類の精神史全体に踏み込んだ思想的検証を除けば、とくに基本的に新しい思想的深化は見当たらない。ただ、こうした書き直しの状況から、シュヴァイツァーが体系を意識した記述からやがて人類の精神史への展開（とくに第一分冊に見られるように、インド思想・中国思想の章が拡大してインド思想史や中国思想史となっていた）に移行していく様子が窺われる。

こうした全体的構想からは人類の精神史全体の検証という性格が強く打ち出されており、それ自体はもはや文化そのものを哲学的探究の主題とはしていない。この点で重要なのは、『世界宗教における文化と倫理』である。ここに収録されたのは、いずれも人類の精神史探究という世界哲学的意図が込められた原稿群であり、明確に文化哲学という枠組みを超えた視座を有しているので、『文化哲学第三部』とは独立したものと位置づけられて編集された。とくに重要なのは、『世界宗教における文化と倫理』（一九一九—一九二二）と『世界宗教における人間と生物』（一九三三）である。前者では、原始宗教や古代の多神論から始まり、中国思想、インド思想、ゾロアスター教、ユダヤ教、イエスの思想、キリスト教と世界の諸宗教にわたり、その世界観と倫理および文化の関係について詳細な分析と検討を行う。後者はいわば前者の姉

妹編であり、具体的な姿として現れる動物保護や尊重の思想が世界宗教においてどのように生まれ、どのように展開してきたかを詳論する。ここでは、あたかも水が勾配に沿って流れ、ついに海に注いでいくように、人間と生物との間の全ての限界を超えて、生きとし生ける存在との結びつきに至る（Kew 182）という倫理の思惟必然的な展開が扱われる。

遺稿に見られるシュヴァイツァーの世界哲学の構想の特徴は、次の二点にある。

まず第一点は、徹底して倫理的視座からその歴史観である。彼は倫理の登場に焦点をあてて、人類の精神史を通覧している。彼が注目するのは、人類が伝統の風俗習慣によらず、新たな倫理的認識を獲得した時期である。（この時期は、時代的にはヤスバースの言う「枢軸時代」と重なる。ただヤスバースは、人類の意識変革の時期として、人類が全体としての人間存在とその限界を意識し、今日につながる精神史の軸とみなしているのに対して、シュヴァイツァーによる倫理的刷新への着目は対照的である。）

「ユダヤの預言者アモスとイザヤ（前七六〇—七〇〇）、ゾロアスター（前七世紀）、そして孔子（前五六〇—四八〇）の三人は、人類の精神史において大きな転換点を画している。これらの思索者たちは、紀元前八世紀から六世紀の間に、遠く離れて互いに没交渉にある三つの民族に属しながらも、相応じて等しい認識に達したのである。すなわち、倫理とは、伝統

の風俗習慣に追従することなく、個人が隣人のために、あるいは社会状態の改善のために常に活動的に献身することである、という認識である。この大きな革命において、人類は精神的な人間へと成長を開始し、それとともに最高度に発展しうる文化が成立したのである。」(UD 128)

第二点としては、人類の精神史の思想的内実として、宗教と哲学の相連の相対的な評価である。宗教も哲学も、共に思惟することと Denken としての動的な営みとして捉えているのである。『文化哲学第二部』(一九二三)において、すでに哲学的倫理と宗教的倫理は、一方が科学で他方が非科学であるのではなく、両者とも思惟であると規定された (KE 23)。違いがあるとすれば、前者が伝統的な宗教的世界観から自己を解放しており、後者はそれとの関係を維持しているだけのことである。

「実際には世界宗教の世界観は、哲学の世界観と同様、思想家の創造物である。内容に関していえば、哲学の世界観と世界宗教の世界観との間には区別はない。世界宗教の世界観が宗教的で、哲学の世界観が非宗教であるというのではない。あらゆる真に深い世界観は宗教的なのである。」(K III 112)

190)

それゆえ重要なのは、思惟の営みとしての必然性 *Denknotwendigkeit* であり、人類の精神史は、世界人生肯定的世界観の倫理的神秘主義へと収斂されていく(その頂点をなすのが生命

への畏敬の倫理的神秘主義と、彼は考えていた。「ヨーロッパの思想は、倫理的な世界生命肯定の世界観が内容的には最も価値があるという認識によって導かれている。また、インドの思想は、神秘主義こそ完成した様式の世界観であるという認識によって規定されている。それゆえ、ヨーロッパの思想は、神秘主義という様式の倫理的な世界生命肯定の世界観に到達するよう努めなければならない。一方、インドの思想は、神秘主義に対して倫理的な世界生命肯定を内容として与えるように努めなければならない。」(UD 14)

しかしながら、シュヴァイツァーのこの探究は、巨大なトルツのまま残された。一九四五年以降は、彼はその続行をついに断念し、今度は「キリスト教における神の国の理念の展開史」という形で、歴史的神学の研究に移っていくことになった。それは、おそらく人類の精神史の詳述的探究については、ほぼ彼なりにやりつくしたからではなからうか。生命への畏敬という指導理念に照らされつつ、古今東西のさまざまな思想を世界観と倫理の視座から、彼は時間をかけて一つひとつ可能な限り吟味してきたのである。一見、混沌とした記述の中にも、その有り様は十分伝わってくる。

また、一九四五年以降の時代的狀況への彼の危機意識の高まりも見逃せない。いわゆる「冷戦」時代の核戦争の危機感の中で、彼はむしろ人類にとってより焦眉の急である「神の国」という課

題のほうを取り上げなくてはならない」と考えたのではなからうか。神の国の理念こそ、キリスト教を通じて絶対的な平和の理念として理念化されていた。(なお、神の国の理念の変遷史の執筆完了(一九五二)後は、さらに直接的に平和問題そのものを論じていることが多くなっていくことと、その「社記してせう」)

※【】内は筆記中。

- Albert Schweitzer, *Aus meinem Leben und Denken*, Leipzig 1931. Unveränderter Nachdruck der Ausgabe von 1959, Hamburg (Felix Meiner), 1980. 【LD】
- , *Kultur und Ethik*, München 1923. *Kultur und Ethik. Nachdruck der Sonderausgabe*, München (C.H.Beck) 1990. 【KE】
- , *Das Christentum und Die Weltreligion*, München 1923. *Das Christentum und Die Weltreligion. Zwei Aufsätze zur Religionsphilosophie* München (C.H.Beck) 2. Aufl., 1978. 【CW】
- , *Die Weltanschauung der indischen Denker. Mystik und Ethik*, München 1934(1), 1935(2). Nachdruck 1987 der 3. auf Grund der englischen Ausgabe von 1935 neu gefalteten 1965. 【ID】
- , *Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben. Kulturphilosophie III*, hrsg. von Claus Günzler und Johann Zürcher, München (C.H.Beck) Erster und Zweiter Teil, 1999. 504S. Dritter und Viertes Teil, 2000. 493S. 【KE 1/2, 3/4】
- , *Kultur und Ethik in den Weltreligionen*, hrsg. von Ulrich Körtner und Johann Zürcher, München (C.H.Beck), 2001.

467S. 【KEW】

Hans Lenk, *Ethik und Weltanschauung*, 'Zum Neugickheit von Albert Schweitzers >Kulturphilosophie III<, *Albert Schweitzer heute*, Tübingen (Katzmann) 1990. 【Lenk】

金千昭『シュウマイツマー その論理的・神祕主義の構造と展開』(日記社'一九九五年)。【金子】

Claus Günzler, *Albert Schweitzer. Einführung in sein Denken*, München (C.H.Beck), 1996. 195S. 【Günzler】

Ulrich Neuenchwander, *Christologie-verantwortet von den Fragen der Moderne*, Bern-Stuttgart-Wien (Paul Haupt) 1997. 【Neuenchwander】

(かねじ)・あやひ・倫理学・天理大学助教授)